

祈りと賛美を虹にのせて

コロナ禍で活動が制限される中、リモートでの懇談会や勉強会を通して交わりを深め、今回ニュース・レターを発行する運びとなりました。タイトルは、このニュース・レターが教区と教区、教会と教会、人と人の「架け橋」となることを願い、また神さまが置かれた契約の虹、多様性を表すカラフルな虹をイメージしてつけられました。礼拝と音楽にかかわる仲間たちが今伝えたいことをお届けします！

パンデミックをも貫いて

—— 祈り続け、思いめぐらすこと

司祭 宮崎 光（日本聖公会東京教区）



新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック（世界的大流行）は、人類史的大変革を、誰もが余儀なくされています。この1年半以上に渡る「コロナ禍」で、実に多くの命が失われました。今生の別れに涙したり、そのいたみを慰め合う時間も与えられずに、戸惑いや恐れに振り回されてきました。まさに「突然、奪われた」多くの命を覚えて、これから先も、祈ることを怠らないでいたいと思います。

「そうまでして、歌わなくてはならないのですか？」

他教派の或る牧師さんから、「こんな問いに私たちはどう応えられるでしょう」との話題が持ちかけられました。彼は、コロナ禍の始まりの頃、医師（クリスチャンではない友人）から「礼拝で共に歌うことは避けた方が良い」と言われました。「礼拝で聖歌が歌えない」のは苦渋の決断なので困惑していると、「そうまでして、礼拝の中で歌わなくてはならないものなのですか？」と医師から問われたというのです。「礼拝に音楽・歌は必

要不可欠」、「歌は礼拝の構成要素」と歴史や伝統を根拠にしてみたところで、他者の命を損ないかねない、今の危険を冒してまで、「歌わなくてはならないもの」と言えるのか、という極めて本質的かつ実践的な問題提起に思えます。

「歌うことで、皆の心は一つになる」かもしれないなら、それまでは「元気を出すために歌っていた」のでしょうか。歌わないと、神への賛美と感謝をささげる礼拝にはならないのでしょうか。歌を聴く、音楽を聴く、だけでは不十分でしょうか。いつの日か思いっきり歌えるようになるのでしょうか、それまでは「歌わない、ガマンの礼拝」をささげて凌ぐのでしょうか。そのようなとらえ方は、時間的にも心の上でも、もったいないと思います。今、「何のために聖歌を歌っていたのか」を考えることは、礼拝とは何か、教会の宣教とは何か、信仰生活とは何かを見つめ直し、本質を見極めて、体験的に刷新してゆく道しるべとなります。それぞれの教会で、「聖歌を歌う意味は何か」、「共に歌わなくてはならないのか」といったことなどを話題にしてみてもいいのではないでしょうか。

＊日本キリスト教団出版局『礼拝と音楽』187号（2020年季刊）に『歌えない時に—「歌わないけれども歌う」という新しい関心』という拙論で、具体的提案も挙げてみましたので、よろしければご参考に。

北関東・東京・京都・大阪4教区

礼拝・礼拝音楽関連委員会オンライン勉強会から

去る6月28日にオンラインによる教役者パネルトークをしました。①様々な制約の中で、どの

ような礼拝の持ち方をしていたか、実情・現状の報告。②教会として、また教役者としては何を大切に考えて、選び取ってきたか。③コロナ後はどう変わってゆくのだろうか、その展望について4教区8人の教役者(※)に、現場からの発題を聞きました。

1. 教会・礼拝をどういう方法でしているか。

洩れなく隅々まで情報やメッセージを行き渡らせるためには、やはり「紙媒体」(文書や手紙など)が有効であるという実感が、共通して報告されました。もちろん、オンライン、電話、SNSなど多様な方法で、教会・礼拝を模索し、どうすれば安全に、心を尽くせるか、という工夫などの具体的な情報交換も、鼓舞し合うものとなりました。

2. 情報伝達の技術的な得手不得手などの問題。

送り出し側(教会)にも受け側(信徒)にも、情報伝達や周知の仕組み(ツール)によって差異が生じた1年であったことが明らかになりました。でも確実に、急激に、止む無しでも、オンライン・ツールの利用に、多くの人が馴れてきています。それを認め、それぞれの足並み(馴れ具合とか)をフォローできるようにになれば、教会の構成員のつながりは、より豊かに深まる希望を感じます。

3. どのような礼拝をささげるか。

「聖餐式」、特に「陪餐」(の方法)が繊細な問題です。「手掴み、手渡しによる飲食行為」と見なされるとしたら、命を養う聖餐を前に、感染リスクへの不安をよぎらせてしまうのです。「そうまでして、陪餐しなければならないのですか？」という新たな問いに、今、どう応えられるでしょうか。その点、「み言葉の礼拝」は、聖書朗読とメッセージ(説教)に集中しますので、牧師の説教には遅れたけれど陪餐だけする、という礼拝参加は無くなります。教役者は皆、今の時の説教に日々ますます注力しています。今は、「聖餐に与ることができない」という気持ち、求める心、そして「すべての人が招かれている主の晩餐」としての聖餐式の意味を確認する大切な機会だと思います。

4. 音楽について。

聖歌の歌詞の内容が重要となります。一つの礼拝で1~2曲くらいしか選べない場合、従来の4~5曲選んでいた時とは違って、選曲する人(教役者か奏楽者か)にとっては、気合の入れどころにもなると思います。会衆は歌わず、奏楽のみ行ったとしても、「何の曲を、なぜこの礼拝で選んだか」に気を遣いたいところです。安易な選曲や、意味のない間つなぎ(無音状態を埋めるだけの不用意な音楽)は、かえって祈りを混乱させてしまいますので注意が必要です(これは、コロナ禍前も後も、気を遣う点ですね)。

5. 教会の交わり、集いのこれから。

オンライン活用が増えて、画面を通して話したり、祈ったりすることにも、それなりの手ごたえを掴んできた1年だったとも言えます。この経験は、対面の諸集会が回復しても、オンラインのプログラムの可能性は広がったと言えます。

ひらきーキリストからのリモートワークなんだ！

長びくコロナ禍で、礼拝の動画配信も盛んに行われるようになりました。ライブ配信(生中継)であろうと、収録動画の視聴であろうと、たとえ時間が異なっても、その礼拝のメッセージは、受け取る人(観る人)の姿勢で変わってくると私は考えます。礼拝に参加する意識で動画を開けば「リモートによる礼拝」、しかし、ある興味や関心(聖歌は何か?どんな礼拝かな?とか)で観ているならば、それは「動画鑑賞や番組視聴」なのです。そこから私は、「礼拝とは何か」、「時と場を一緒にしていないと礼拝ではないのか」という問いに向き合っています。これは決して、新しい問いではないのかも知れません。なぜなら、二千年前に行われた「最後の晩餐」が「今」につながって「聖餐式」をささげていることが、まさに主イエスからの「リモートワーク」だと思えてきたからです。教会の宣教とは、まさに主イエス・キリストのリモートワークです。時間や空間がどうかという以上に、主に出会った人たちの経験を共有し、拡散し、継承して、今、これからがあるのです。

北関東教区

鈴木伸明司祭

主の平和

2021年4月1日、北関東教区は伝道教区となりました。今後は東京教区と多面にわたる協働を企画実行すると共に、組織や財政についての諸課題も含め、新しい教区の新設へ向けて両教区がこれから取り組んでいくことになります。より多くの方々が北関東教区のために祈り、関心を持っていただけるのを心強く思っています。

北関東教区では東京都心に近い埼玉伝道区を中心に、2021年初頭より今日までほぼすべて、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言、およびまん延防止等重点措置が発出されており、教区内各教会で公禱を休止したり、主日礼拝における聖歌の省略や一種陪餐など、大きな影響を受けています。また附属事業である幼稚園は、時代の要請より大半の園が認定こども園に移行しており、園児および教職員の感染防止や安全対策に細心の注意を払いつつ、緊急事態宣言下でも保育活動が続けられています。

新型コロナウイルスは収束せず、ウィズコロナが指摘される中、どのタイミングで歌声が響く通常の聖餐式に戻していくのか。また諸集会や勉強会、バザー、今冬のクリスマスをどのように迎えるのか、そして何よりも、私たちが考えてきた「日常」とは何であるのかが、今、改めて問われています。

東京教区

斉藤響子

昨年3月4日付の主教教書(4)で公開による礼拝は一齐休止。主教座聖堂は礼拝の配信を即開始。戸惑いつつ「毎週主教の説教が聞ける」など、最大限プラスにとらえようとした方も。その後、7月から再開、そして12月27日以降の再度一齐休止。イブ礼拝から休止にした教会も多くありました。東京では、教会のある町をいくつも通り越して来る信徒も少なくありません。教会の社会的責任をも考え、また「近く教会なら行ける」ようにしないため、必要な措置だったでしょう。

そして今年7月4日から一齐休止が解かれ(教書23)、再び各教会の判断に委ねられましたが、また緊急事態宣言。9月現在ほとんどが休止中です。数回の公開礼拝を行い再休止した教会もあれば、そのまま休止継続の所も。

この間、礼拝の配信を行う教会が増えました。礼拝音楽委員会のアンケート調査によれば、半数以上の教会が何らかの形で礼拝や祈り、メッセージ等を配信しています。私も画面越しの礼拝に慣れました。また、信徒の公平性・技術面等のため行わず、可能な方には他の配信の視聴を勧める教会も多くあります。いずれにせよ郵便も使い、公開休止＝教会休止ではないよう努力が続けられています。

4 教区協働◆これまでの経緯

北関東と東京、大阪と京都は、それぞれ新しい教区のあり方を求めて協働関係を進めています。私たちの出会いはそのような組織的な枠組みからではなく、個人的なつながりの輪から生まれました。交わりを深める過程で、昨年末のクリスマス・メッセージ動画発信や今回のニュース・レター発行に至ったことは大きな喜びですが、「何かをすること、作ること」が目的ではありません。お互いの状況や思い・悩みを聴きあい、学び合う中で「今できること」を一緒に探っています。

恐らく、コロナ禍がなければつながらなかった私たち。同じ気持ちでつながってくださる方々の輪が、これからも広がっていくことを願っています。



今、届けたい 聖歌



1
「あたらしい朝よ 目覚めよ」
つい最近ある方が、コロナ禍に妊娠して感じておられる不安について話して下さったことを思いながら庭掃除をしていたとき、この聖歌のメロディーと歌詞が浮かんできて頭の中で流れて続けていました。

342
「とこしえの父は 荒波を治め」
昔、船乗りを送り出すときの歌で帝国主義の歌だという向きもありますが、with コロナの時代に向かってそれぞれの立場で頑張っている人たちへのエールとして、元気を出そうと歌いたい。

374
「心の扉をひらくと」
コロナ禍、心の扉を閉じがちな私たち。でも、神様のお恵みは閉じた心には入ってきません。心の扉を開いて神様の言葉を聞きましょう。

456
「十字架の血に」
いま私たちは未曾有の困難な時を過ごしています。でも主イエス様が一緒です。主イエス様はどこか。十字架におられます。そして招いておられます。「主よわれは今ぞ行く」とお応えし、御許に進み出ることで、主イエス様と共に困難を乗り越えられると信じます。

482
「いつくしみ深き友なるイエスは」
コロナ禍の中にも、イエス様は私たちを「友」と呼び、重荷を負い、祈りに応え、私たちを愛し導いてくださるからです。

コロナ禍で苦しんでいる人へのメッセージとして

「長い夜にも朝は訪れる」という希望に励まされます。2譜よりも朝の感じがするので第1譜で。元気がでます。

2
風に目をさまして
「試みにもがく中に共に立つ仲間を知る」(3節)

終わりの見えない中、手探りで進まねばならない現在の心持ちと一致。今は断然、第2譜のメロディーで歌いたい！心が支えられます

325
み手の中で
コロナ禍で辛い選択を迫られることもあると思います。神様に委ねることで気持ちが穏やかになれば、と思いました。

458
神の恵みは くすしきかな
こんな不安な時だからこそ、「神を賛美しよう ハレルヤハレルヤ」と歌って、元気を出したい。

477
恐れにとらわれ
地球温暖化による自然災害、感染症など、かつてなかった困難の中で不安や恐れに囚われているとき、気づきと力を与えられる聖歌です。

344
そのとりは
空が晴れていると嬉しくなる、日曜学校時代の思い出の曲です。

529
おまえはわたしの愛する娘
自分の足で立て困難に直面している人びとへの、慰めに満ちた励ましのメッセージです

37
夕日落ちて 夜は訪れ
「良き働き果たす時を神はいつも見つめているわが心を改めて従います み心に」(3節)

418
「だれもひとりだけでは生きてはゆけないだれもひとりだけでは死んでもゆけない皆それぞれお互いに応えあう神さまに結ばれた者だから」

491
あめなる喜び
こよなき愛を
現在の状況においては不安を感じますが、神様が私たちを愛していることを覚えましょう。

38
キリスト 力ある主よ
神さまが力よく支えてくださることを感じます。明けぬ夜はないと、励まされる思いがします。

当たり前でできていた信仰生活。それができないもどかしさ、元に戻そうともがく中で、やっと変わる事の大切さに気づかされました

歌詞のメッセージ
そのものを今伝えたいです

492
神こそ愛なり
私たちを包み、世界を抱き、共にいて痛みを担ってくださる神様こそ愛である。

546
十字架を背負えと」
アメリカの聖歌集にならってO WALLY WALLYの旋律にあわせてみたら、この傷んだ社会へ「日々派遣される」私たちの歌になりました。

487
「重荷背負う人に」
コロナ禍に、重荷を負う人々に寄り添い、癒し、新たな道へ伴ってくださる神さまの愛を感じることが出来るからです。

499
「さやかな光 色づく木々に」
当たり前教会生活が一変し心が揺らぐことも多い中で、この詩には変わらぬ季節の移ろいに現される神様の業、苦しみに寄り添ってくださるイエス様の深い愛を感じ、ひたすら慰められます。

516
「み恵みあふれ輝く光よ」
パンデミックの収束が見えない中にこそ、私たちの「弱る足を守りてひと足 またひと足」、主が導いて、先立ち、伴ってくださることを祈りながら歌っています。少しずつ、一歩ずつ、慌てなくていいから、と自分にも言い聞かせています。

527
「傷ついた人の祈りにこたえて」
今収束の光の見えないコロナ禍において、主のいやしは何よりも力を与えられるからです。

526
「見つめることから」
コロナ禍になり、出来ない事がたくさん出ました。それでも、小さな事で良いから、出来る事に目を向ける大切さを思われました。人と人の間に隔てを作る感染症対策。でも「あなたのすぐそばにいる」との言葉には力を感じます。

京都教区

…に限らず、日本聖公会の宝物

✎ 中尾貢三子司祭

京都教区からは、教区立の神学校、「ウィリアムス神学館」をご紹介します。

神学館は1948(昭和23)年に設立されました。主たる建物(ニコルス館)は京都教区主教でもあったS.H.ニコルス(Shirley Hall Nichols)師父の住居として建てられ、1931(昭和6)年に完成しました。部屋数も多く、ゲストハウスの機能も持たせて建築されたのではないかと思います。おかげで現在も神学生の生活の場として用いられています。

玄関を入ってすぐの正面階段には、鐘が下がっています。朝昼夕の礼拝前には、神学生の手によってこの鐘が鳴らされ、祈りの時を知らせます。神学館の一日は祈りで始まるのです。

神学館の礼拝堂は教区センタービルの1階にあります。正面の十字架やいくつかの絵画、リードオルガンが祈りの場を整えています。3年前には長年ほとんど使われていなかった、チャペルと食堂のリードオルガンをオーバーホールし、礼拝や教会音楽の授業等で豊かな音色を響かせています。ここで共に祈り、学び、それぞれの宣教の場へと遣わされていくのです。



大阪教区

震災をくぐり抜けたオルガン

✎ 辻彩乃

大阪教区・主教座聖堂の川口基督教会は、2020年に宣教150周年を迎えました。30年前、120周年記念として奉獻されたパイプオルガンは、ドイツ・リンク社製です。阪神・淡路大震災では教会の塔が倒れ、聖堂も大きな被害を受けました。しかしオルガンは無事でした。聖堂修復工事のためオルガンは一旦解体され別の場所に保管。その後1ミリの歪みもなく無事に再建され、今日も賛美を支える器としての役割を果たしています。

また、150周年記念として「漆の十字架」が奉獻されました。教会にあった古い木の十字架に漆塗りや螺鈿と蒔絵の技法を用いて装飾されています(川口信徒の漆芸家・内海紗英子さん作)。

「大阪市地域魅力創出建築物修景事業」の補助金によってライトアップ工事も完了。今年3月から毎日福音の光を発信し続けています。



北関東教区

地元産の石を積み上げた近代建築

✎ 越智容子執事



「日光真光教会(設計J.M. ガーディナー)」は1916年に聖別された、北関東教区に現存する最古の教会です。ガーディナー師、マン婦人宣教師によって教会の礎が築かれました。

聖堂の外壁は日光の大谷川などから採取した安山岩、内壁は地元産の板橋石が使われています。屋根を支えるシザーストラスの梁と、内陣スクリーンが印象的。聖壇上部の丸いステンドグラスはラファエロの絵画「キリストの変容」をモチーフにしています。リードオルガンは1899年製作のMILLER社製。

ガーディナー夫妻の遺骨は遺言により、礼拝堂の聖書朗読架前の床下に並んで納骨されています。

毎週礼拝を守りつつ、教会は地域にも開かれ、結婚式、観光客の見学、立教大学聖歌隊による礼拝の奉唱、藝大バツハカンタータクラブの合宿・コンサートなども行われています。

少ない信徒数で、長年、礼拝と教会を守り、地域の方々にも愛される教会となっています。



教区 の た か ら も の

東京教区

東京にある「島の教会」

✎ 笹森田鶴司祭(小笠原聖ジョージ教会管理牧師)

島で唯一のキリスト教の教会である小笠原聖ジョージ教会は、本州からおよそ1000キロ離れた小笠原諸島父島にあります。一度も陸続きにならなかったことのない世界自然遺産の美しい亜熱帯気候の島への交通手段は、6日に一便の船のみで片道24時間かかります。

捕鯨中継地であった無人島に1830年最初の移民が定住、欧米や太平洋諸島からの人々が移り住み、1876年には日本領土となります。その20年後頃から英国聖公会SPGからの定期的な来島が実施され、その援助を得て1893年に「日本聖公会小笠原教会所」が設立。初代牧師は父島出身ジョセフ・ゴンザレス司祭です。

太平洋戦争時の欧米系島民への強制改名や戦争激化による全



島民の突然の強制疎開、敗戦後の米軍統治下の欧米系島民120余名のみの生活を経て、1968年に日本に返還されます。以来日系島民の帰島が進みましたが、硫黄島帰島はまだ許されていません。現在の教会は、返還直前に米軍によってChapel of Peaceとして建築されたものです。

神さまの創造の美しさと人間の愚かさによる戦跡が島の生活の間近にある、また多様な文化形成などの稀有であり知られていない歴史をもつ離島の教会から、その名の通りひたすら神さまの平和の実現のため、皆さまのために祈っています。

京都教区



私たち京都教区は2府6県から成り、何より教区内交流が活発なことが誇りであり自慢・・・のはずだったのですが、コロナ禍になってから県をまたぐ移動自粛になってしまい、我々信徒は京都から出ず、京都へ行けず、聖職の先生方を京都からお迎えすることもできず、「来月の礼拝はどうしましょう？」という話題が教会委員会の議題にあがる日々です。

京都府内は、まだまだ礼拝休止のところも多いですが、各県どこの教会も感染対策とどこまで元の礼拝に戻せるかという試行錯誤が続いています。しかしそれは、自分たちの教会の未来を自分たちで決める旅だと思えます。

大阪教区



心と魂の支えである礼拝の休止が、こんなに長く続くとは誰にも予想できないことでした。暗さやしんどさの拭えない我慢の日々ですが、神さまが何をおっしゃりたいのかをしっかりと受け止めなければ、と思いながら過ごす日々です。併せて、このような礼拝のできない時にも、神さまは私たちに恵みを注いでくださっていることも感じています。

大阪教区には、大阪府に19、兵庫県に3つの教会があります。磯主教のメッセージにより、緊急事態宣言中の公開の礼拝は休止ですが、「いのちを守り合うこと」「教会の社会的責任」を踏まえつつ、どのような形で礼拝を守るのかは、各教会の状況に任されています。6月に行った各教会の礼拝状況アンケート調査項目の、オンラインでの配信状況では、YouTube、Zoom、Facebookなどを使用し、12の教会が何らかの配信を行っていました。配信をしていない教会では、週報や説教・教会だより・家庭での祈りの郵送、牧師や信徒の訪問、電話やメールでの安否確認など、工夫をしています。皆で集い、共に感謝と賛美の礼拝ができる日を待ち望みます。主の平和

編集後記



編集委員たちの間では「虹NL」の愛称で呼ばれているこのニュース・レター。試行錯誤のやり取りの中に、物理的な距離を超えた協働の喜びを感じています。これからも小さなつながりを大切に、次号（発行日未定）では礼拝と音楽に関わる仲間たちの輪がさらに広がっていることを期待したいと思います。

のぞいてみてね

Youtubeチャンネル「Liturgy and Liturgical Music Project」に、今号の内容に関連した動画を随時アップロードしていきます。記事に出ていたあの教会、あの聖歌が、生き生きと登場します。おたのしみに！

